福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1353 集

比恵（ひえ） 85

－比恵遺跡群第 147 次・108 次調査報告－

２０１８
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1353 集

比 恵 85
HI E

－比恵遺跡群第 147 次・108 次調査報告－

遺跡略号　HIE－147、108
調査番号　1633、0636

２０１８
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は、共同住宅建設に伴い博多区博多駅南４丁目地内において実施した比恵遺跡群第147次・108次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期におよぶ井戸、弥生時代中期の竪穴建物、古代の溝、柱穴などを検出しました。井戸からは祭祀に使われたとみられる壺・甕など完全な形を保った土器が出土しました。その中には網目の跡が残る珍しいものもあり、実際に水の汲み上げに使ったとみられます。竪穴建物も斜めに打ち込んだ柱穴を持ち、特殊な用途が想定されます。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、事業者様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成30年３月26日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は福岡市博多区博多駅南４丁目 132 － 1 地内において実施した比恵遺跡群第 147 次・108 次調査の報告である。
2．検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
　ピット　ＳＰ　　竪穴建物　ＳＣ　　溝　ＳＤ　　井戸　ＳＥ　　土坑　ＳＫ
3．遺構の実測は木下博文および吉留秀敏（１０８次）が行った。
4．遺物の実測は木下博文が行った。
5．遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6．製図は木下博文が行った。
7．本書で使用した方位は磁北で、真北より６° 20′ 西偏する。
8．本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
9．本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号　１６３３	遺跡略号　ＨＩＥ－147	分布地図番号　37　東光寺
所在地　博多区博多駅南４丁目 132－１		調査面積　225.32 ㎡
調査期間　2016.12.1 ～ 2017.1.30		

調査番号　０６３６	遺跡略号　ＨＩＥ－147	分布地図番号　37　東光寺
所在地　博多区博多駅南４丁目 132－１		調査面積　92.93 ㎡
調査期間　2006.8.1 ～ 8.16		

参考文献
埋蔵文化財研究会 2008『井戸再考　弥生時代から古墳時代前期を対象として』第 57 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
埋蔵文化財研究会 2013『続・井戸再考－古墳・飛鳥時代の井戸－』第 62 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集

本 文 目 次

第１章遺跡の位置と環境…… 1
第２章　第 147 次調査報告
　１　調査に至る経緯…… 3
　２　調査体制…… 3
　３　調査の記録…… 4
　　調査の概要…… 5
　　遺構と遺物…… 5
　　井戸
　　竪穴建物
　　土坑
　　溝
　　ピット・包含層出土遺物
図版１～６
第３章　第 108 次調査報告
　１　調査に至る経緯……21
　２　調査体制……21
　３　調査の記録……21
　　調査の概要……21
　　遺構と遺物……21
図版７～ 12
第４章　まとめ……32

挿 図 目 次

図１　遺跡の位置（Ｓ＝１／25000）…… 1
図２　調査地点･調査区位置図（Ｓ＝１／3000、１／300）…… 2
第147次
図３　調査区平面図（Ｓ＝１／150）…… 5
図４　ＳＥ０３および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）…… 6
図５　ＳＥ０４･０５･０６および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）…… 7
図６　ＳＥ０７および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）…… 8
図７　ＳＥ０９および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）…… 9
図８　ＳＥ１２および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）……10
図９　ＳＥ１３および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）……11
図10　ＳＥ１４および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）……12
図11　ＳＣ０８および出土遺物実測図（Ｓ＝１／60、１／３）……13
図12　ＳＫ１１･ＳＤ０１およびピット･包含層出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／２）……14

第108次
図13　調査区平面および西･南壁土層断面図（Ｓ＝１／100、１／80）……22
図14　ＳＥ０１および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）……24
図15　ＳＥ０２･０３および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）……25
図16　147次SE09出土の三韓系瓦質土器（Ｓ＝１／３）……33

図 版 目 次

第147次
図版１　全景（南から）　調査区東半全景（西から）
図版２　ＳＥ０３（南から）　ＳＥ０４（北から）　ＳＥ０５（北から）　ＳＥ０６（西から）
　　ＳＥ０７（南東から）　ＳＥ０９（北西から）
図版３　ＳＥ１２（東から）　ＳＥ１３（北東から）　ＳＥ１４（北から）　ＳＤ０１（東から）
　　ＳＣ０８（東から）　ＳＣ０８・ＳＥ１２土層断面（東から）　ＳＫ１１（北東から）
図版４　出土遺物１
図版５　出土遺物２
図版６　出土遺物３

第108次
図版７　調査区全景（南東から）　調査区全景および西壁土層断面（北東から）
　　調査区南壁土層断面（北西から）
図版８　ＳＥ０１（南から）　ＳＥ０１土層断面（南西から）　ＳＥ０１遺物出土状況（南から）
図版９　ＳＥ０２（北から）　ＳＥ０２土層断面（北から）　ＳＥ０２壺出土状況（北から）
図版10　ＳＥ０３（北から）　ＳＥ０３遺物出土状況（北から）
図版11　出土遺物１
図版12　出土遺物２

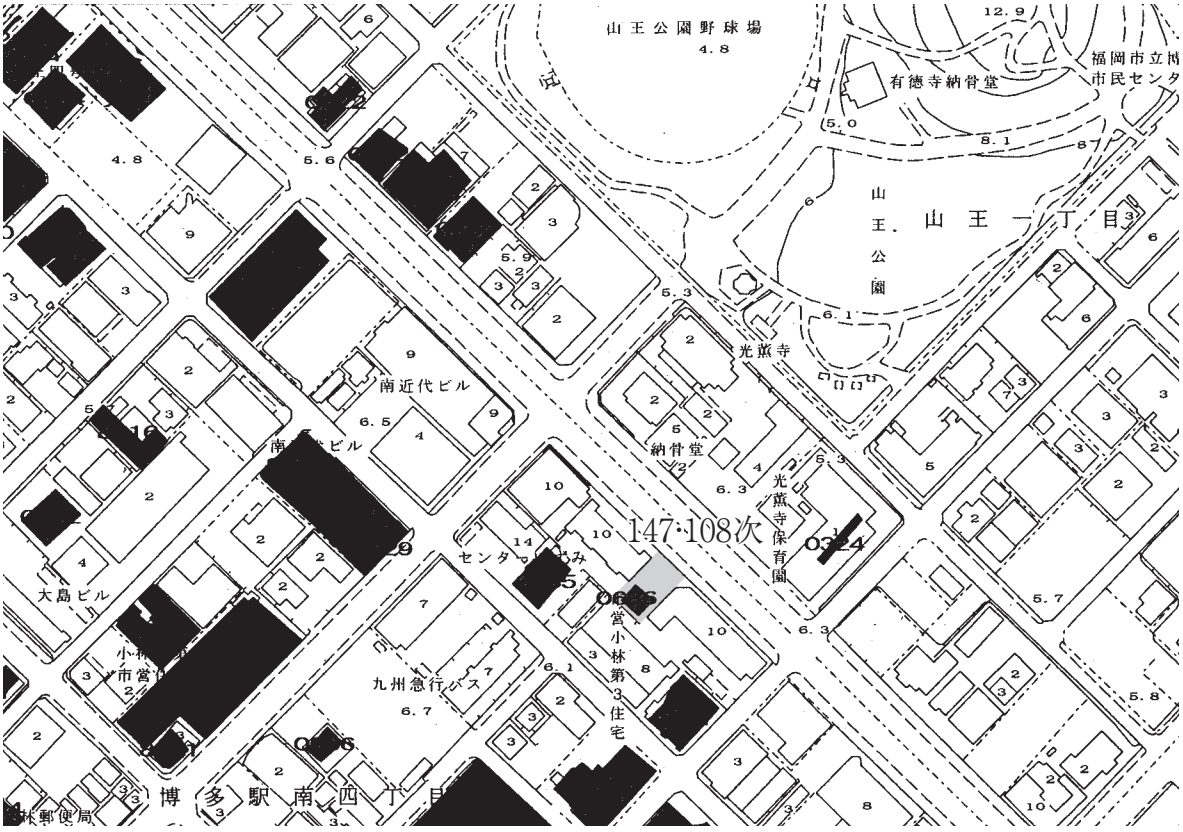
第１章　遺跡の立地と環境

福岡平野中央を南東から北西へと流れる御笠川と那珂川に挟まれた地域には、標高５～７ｍ程度の段丘が形成されている。この段丘は阿蘇山火砕流を起源とする白色の八女粘土、赤褐色・橙色の鳥栖ロームを基盤とする。比恵遺跡群はこの段丘上に立地する弥生時代から中世までの複合遺跡である。南側に続く段丘上に同時期の那珂遺跡群が展開しており、一連のものと考えられている。弥生時代中期に前漢鏡を伴う大型甕棺墓やガラス・青銅器鋳造工房が営まれる須玖遺跡群の所在する春日丘陵を基点とし、比恵遺跡群まで連綿と遺跡が展開することから、奴国の中枢の移動が考えられており、弥生時代～古墳時代初頭における福岡平野の中枢を構成する。

後には『日本書紀』に見える那津官家の所在地が想定されるなど、古墳時代後期～終末期には大和政権にとっても枢要の地となっているとみられている。

今回の調査地点を含む博多駅南４丁目一帯は、昭和27年に調査され県指定史跡となった環溝遺構の発見地や、銅剣を副葬した甕棺墓を含む墓群を検出した６次調査地点などが広がり、比恵遺跡群の中心部に当たっている。今回の調査地点はその北東、遺跡の縁辺に位置し、谷筋を挟んで山王遺跡と隣接する。事前の試掘調査では、台地から谷へと移行する地形の変換点に当たり、井戸の存在が確認されていた。

図１　遺跡の位置（Ｓ＝１／25000）



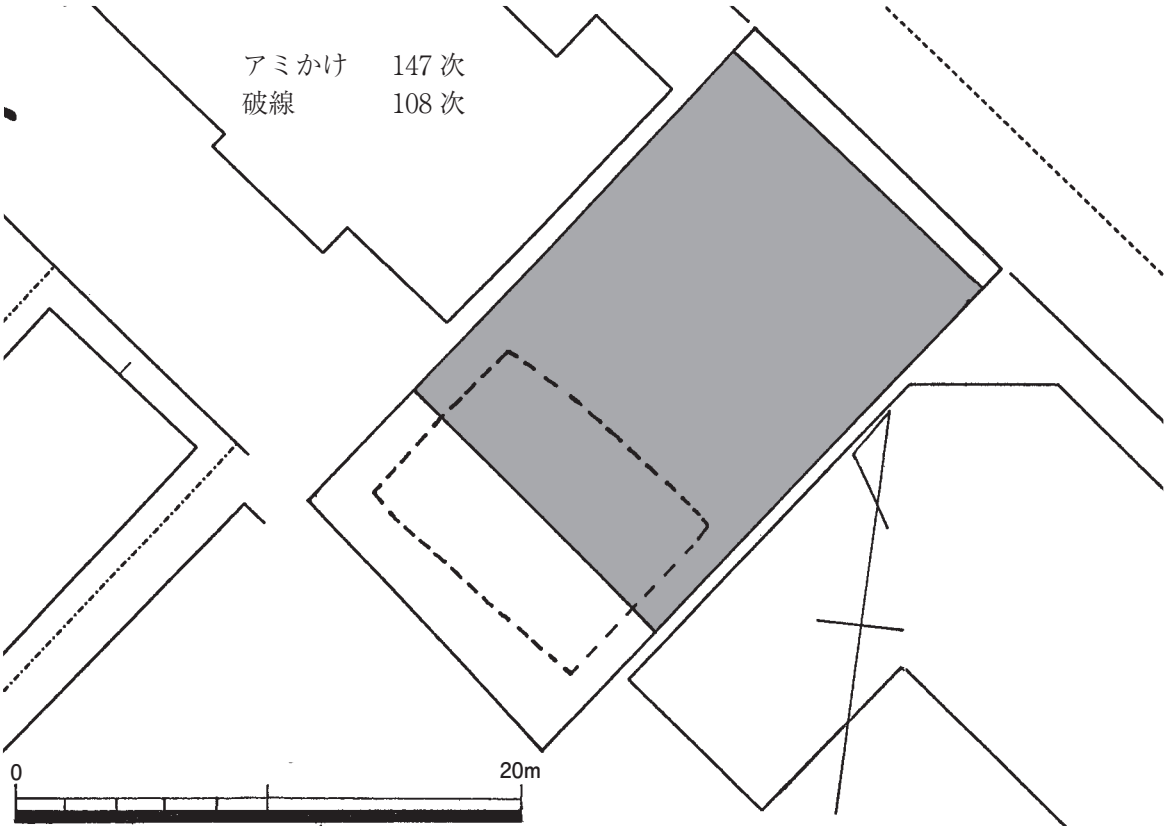


図２　調査地点・調査区位置図（S = 1 ／ 3000、1 ／ 300）

第２章　第１４７次調査報告

１　調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成 28（2016）年 9 月 27 日付で、合同会社　来夢より博多区博多駅南 4 丁目 132-1 地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号 28-2-538）。申請地は比恵遺跡群の範囲内であることから、協議の上同年 11 月 4 日に試掘調査を実施し、地表面下 120 ｃｍで遺物包含層および遺構を確認した。今回の工事は共同住宅建設であり、基礎工事による影響を避けられないことから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成 28（2016）年 11 月末に現物提供により、調査範囲の矢板打ち・表土の鋤取りおよび場外搬出を行った後、12 月 1 日より人力による遺構の検出・掘削から着手した。順次遺構の検出・精査・写真撮影・実測を進め、平成 29（2017）年 1 月 30 日に機材を撤収し終了した。

２　調査体制

調査委託	合同会社　来夢	
調査主体	福岡市教育委員会	
	（発掘調査　平成 28 年度　　資料整理　平成 29 年度）	
調査総括	経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課長	常松幹雄（平成 28・29 年度）
	同課調査第 1 係長	吉武学（平成 28・29 年度）
庶務	埋蔵文化財課管理係長	大塚紀宜（平成 28 年度）
	管理係	入江よう子（平成 28 年度）
	文化財保護課管理調整係	松尾智仁（平成 29 年度）
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長	佐藤一郎（平成 28 年度）
		本田浩二郎（平成 29 年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	池田祐司（平成 28・29 年度）
	同課事前審査係	清金良太（平成 28・29 年度）
調査担当	埋蔵文化財課調査第 1 係	木下博文

調査にあたり、調査区外柵・ユニットハウス・仮設トイレ・電気・水道・表土鋤取りの現物提供を受けた。

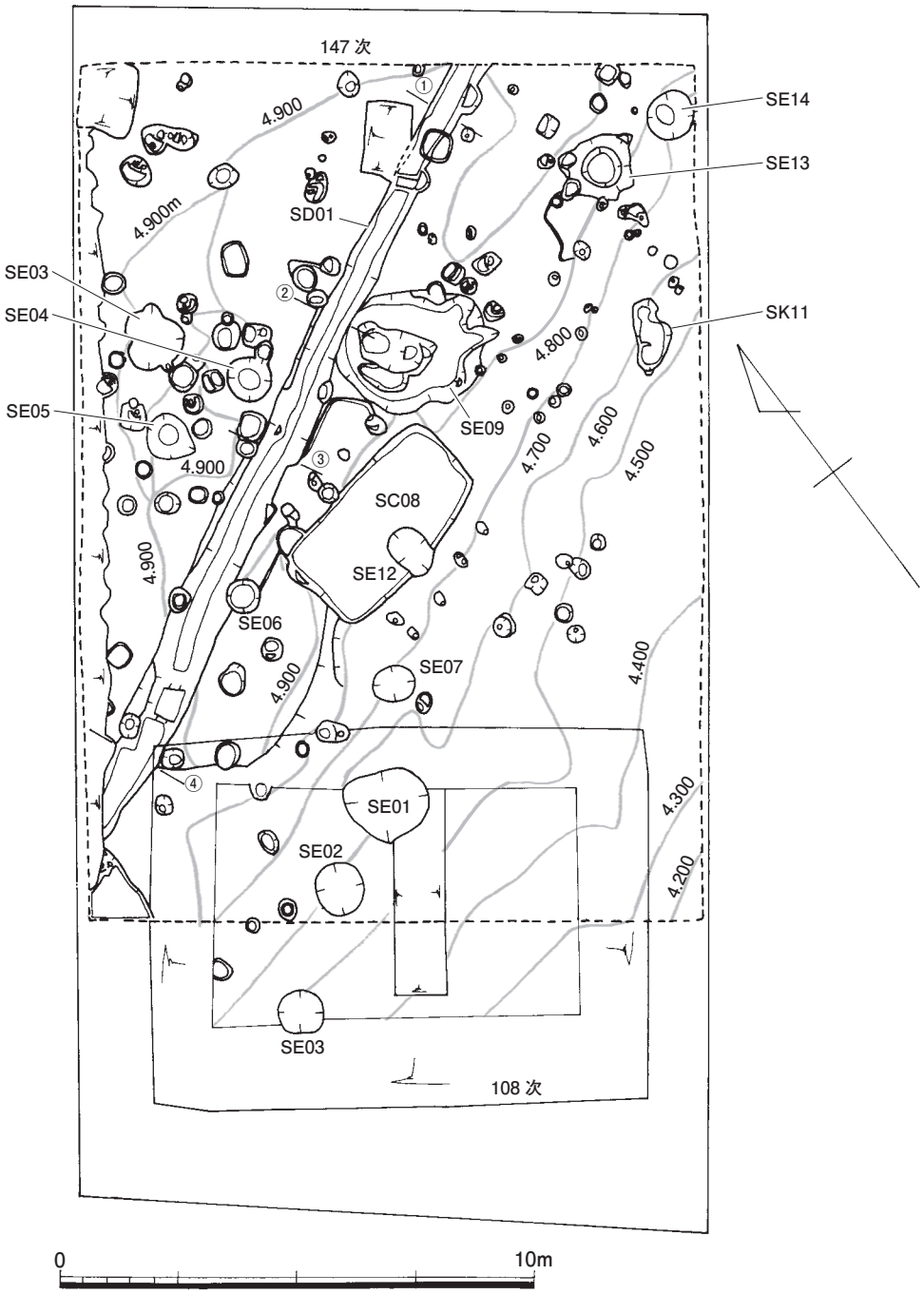


図３　調査区平面図（S = 1 ／ 150）

３　調査の記録

調査の概要

本調査地点は、現況で山王公園の西、筑紫通りに面しており、標高６ｍ余りの場所に位置する。比恵遺跡群の北東部に位置し、旧地形復元では東隣の山王遺跡との間にある南北方向の谷が西へ入り込んだその北岸にあたる。事業地内の南西奥では 108 次調査を実施しており、その調査区を一部含む。

遺構面までの土層堆積は、①客土、②青灰色粘質土（旧水田耕作土）、③黄褐色粘質土（旧水田床土）、④茶褐色粘質土（遺物包含層）となっている。④には弥生中・後期の他、須恵器蓋杯や土師器甕把手など古墳時代後期の遺物が含まれており、谷部を中心に調査区全面に広がっている。

遺構面は現地表下 120 ～ 130 ｃｍ、調査区北半では褐色の鳥栖ロームを基盤とする台地であり、旧地形復元のとおり、南へ緩やかに下って谷となる。それにつれてローム層は黄白色に変化し、白色の八女粘土となる。

谷部では茶褐色粘質土の下に黒色粘質土が堆積し、弥生時代中期以降の遺物を含むものの、量は少ない。

検出遺構は、弥生時代後期から古墳時代後期までの井戸９、弥生時代後期の小屋掛け状竪穴建物１、東西方向の溝１、土坑、ピット 90 を検出した。出土遺物量はコンテナ 32 箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

遺構と遺物

井戸

ＳＥ０３（図４、図版２）

調査区北縁で検出した。東西 12.5 ｍ、南北 13.1 ｍの不整円形で、深さ 1.95 ｍである。底部に完形の複合口縁壺２点を斜めに傾けて置いている。口縁部を１点は上、もう１点は下に向けている。弥生時代後期前半～中葉に属す。

出土遺物（図４、図版４）

１は弥生土器の複合口縁壺である。口径 16.8 ｃｍ、器高 36.3 ｃｍ、頸部径 13.0 ｃｍ、胴部径 17.4 ｃｍ、底部径 8.6 ｃｍ。淡黄褐色を呈し、体部の内外面にハケ目を施す。胴部には菱形をした茶褐色の線の痕が残っており、網目とみられる。胴部をめぐる突帯の内、網がかかっていた部分は網の繊維が擦り切れないようにするためか、欠損が見られる。

２は弥生土器の複合口縁壺である。口径 7.6 ｃｍ、器高 22.5 ｃｍ、頸部径 8.4 ｃｍ、胴部径 18.2 ｃｍ、底部径 6.6 ｃｍ。灰白色を呈し、体部外面にハケ目を施したのち、なで消している。胴部下半に黒斑があり、その端部に 5.9 × 4.5 ｃｍの楕円形をした浅い凹みがある。土器焼成時の剥離痕か。

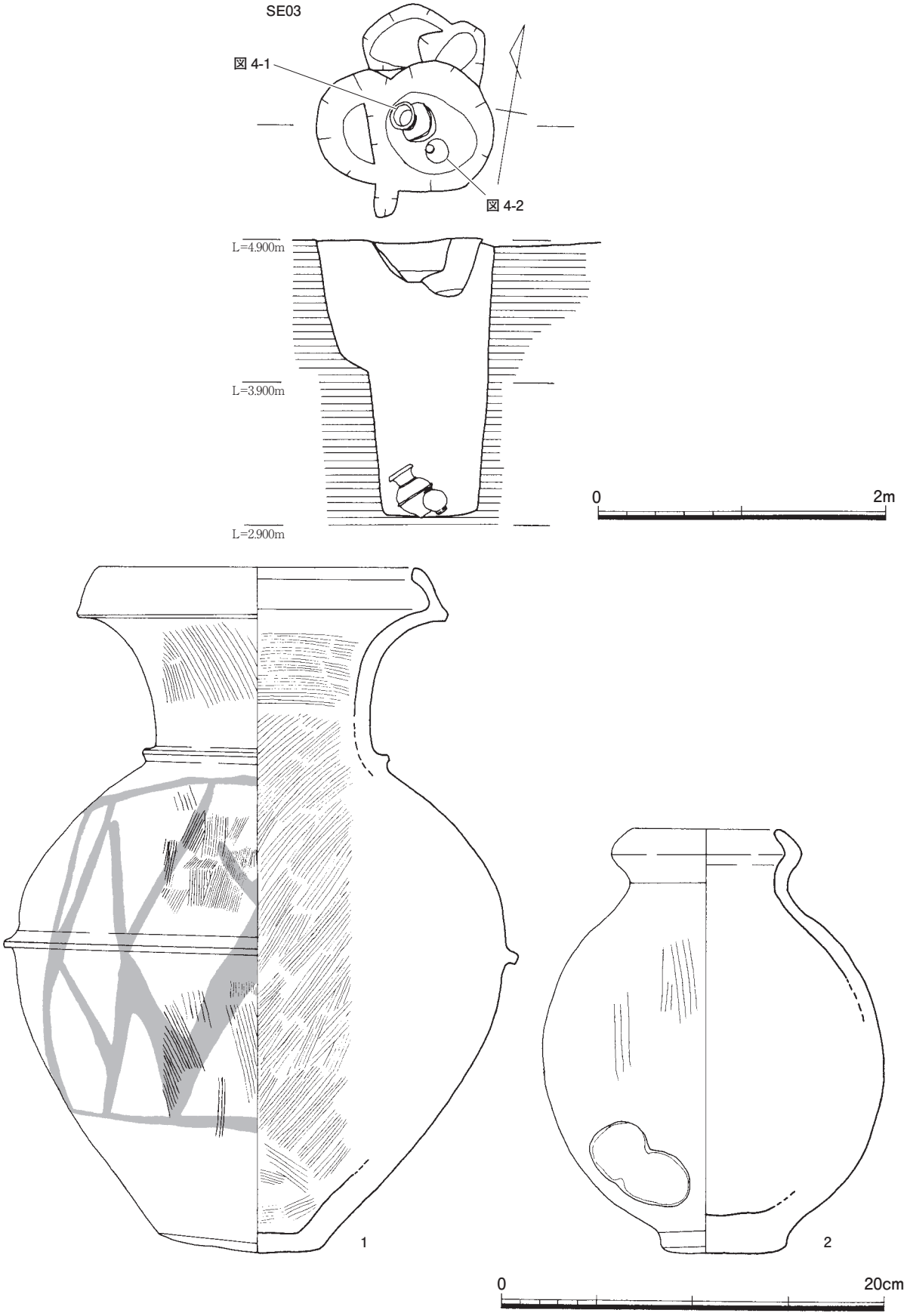


図４　ＳＥ０３および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

ＳＥ０４（図５、図版２）

ＳＥ０３の南東１ｍの位置で検出した。径 0.95 ｍ、深さ 1.3 ｍである。弥生後期前半に属す。

出土遺物（図５、図版４）

３は弥生土器の壺である。復元口径 8.4 ｃｍ、器高 11.6 ｃｍ、胴部径 14.3 ｃｍ、底径 4.6 ｃｍである。内外面ともに淡灰色を呈し、体部下半から底部にかけて黒斑がある。調整は体部下半にハケ目を施す。

ＳＥ０５（図５、図版２）

ＳＥ０３の南西１ｍの位置で検出した。径 0.91 × 1.13 ｍの楕円形で、深さ 1.28 ｍである。土器片に尖り気味の丸底、薄手でつまみ上げの口縁部、細タタキの胴部が含まれることから、古墳時代初頭に属す。

ＳＥ０６（図５、図版２）

径 0.71 ｍ、深さ 0.81 ｍである。土器片から弥生時代終末～古墳時代初頭に属すとみられる。

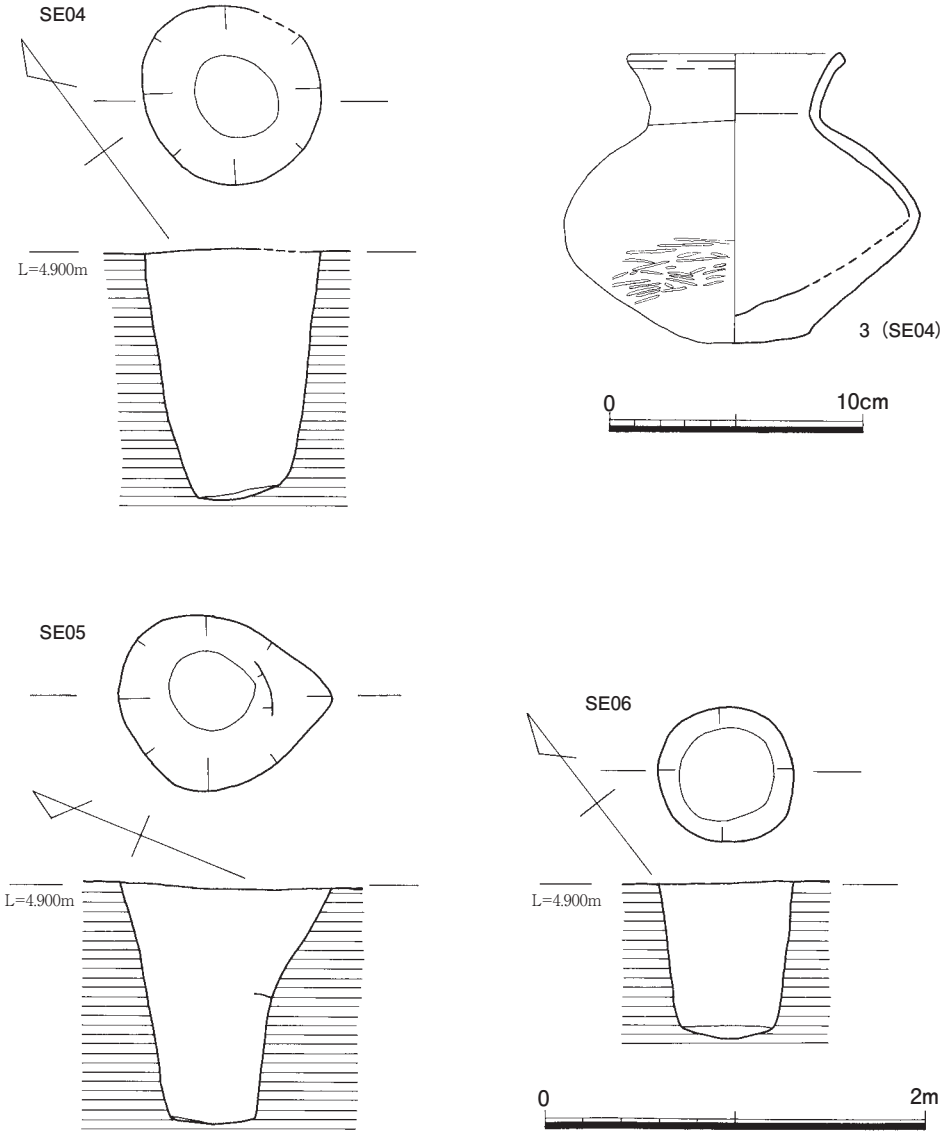


図５　ＳＥ０４・０５・０６および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

ＳＥ０７（図６、図版２）

0.9 × 0.78 mの楕円形で、深さ 0.88 mである。弥生時代終末に属す。

出土遺物（図６、図版４）

４は土師器の壺である。頸部がほとんど残存しておらず、わずかに残る立ち上がりをもとに、短頸壺として復元した。器高 11.3 ｃｍ、胴部径 15.6 ｃｍ。淡灰褐色を呈し、胴部上半の内外面はヘラ削りまたはヘラ磨きの後、なで消しているとみられる。胴部上半から底部にかけて、一部に黒斑がある。５は土師器の小型丸底壺である。復元口径 5.8 ｃｍ、器高 9.1 ｃｍ、胴部径 9.0 ｃｍ。淡灰褐色を呈し、器面は全体的に平滑であるが、頸部と胴部、胴部の上半と下半などの継ぎ目、頸部内面および胴部内面下半にハケ目の痕跡が認められる。胴部下半に 1.4 × 1.1 ｃｍの穿孔を施す。

ＳＥ０９（図７、図版２）

調査区中央からやや東寄りで検出した。3.5 × 2.6 mの不整円形で、深さ 1.5 mである。二段掘りで最深部が遺構の北西寄りにあり、南東側には段差がある。湧水があり、検出面から二段目、最深部の上面までは常に満水になる状態であった。遺構の南東側から昇り降りして、溜まった水を汲み上げたと推測できる。最深部の埋土から古式土師器（布留式）の甕、遺構の上層から丸底壺が出土している。古墳時代前期後半に属す。

出土遺物（図８、図版５）

６は古式土師器（布留式）の甕である。口径 15.6 ｃｍ、器高 26.0 ｃｍ、頸部径 11.9 ｃｍ、胴部径 22.3 ｃｍ。外面は灰黒色、内面は淡灰褐色を呈す。内面はヘラ削り、外面は底部までハケ目を施す。７は土師器の杯である。口径 12.8 ｃｍ、器高 5.9 ｃｍ。淡橙褐色を呈す。８は土師器の壺である。口径 7.2 ｃｍ、器高 11.4 ｃｍ。橙色を呈し、胴部下半に黒斑がある。９は土師器の小型丸底壺である。口径 7.3 ｃｍ、器高 6.8 ｃｍ。表面は淡黄褐色、断面は褐色を呈し、頸部と胴部の境目に細かなハケ目を残す。10 は土師器の高杯である。底径 11.3 ｃｍ、残存高 8.8 ｃｍ。淡黄褐色を呈し、外面にハケ目を施した後、なで消している。杯部との接合を良くするための刻みが上端に残る。11 は土製投弾である。長さ 3.4 ｃｍ、幅 2.1 ｃｍ。淡褐色を呈す。12 は三韓系瓦質土器の壺である。灰白色を呈し、外面に格子目タタキ、内面になでを施す。

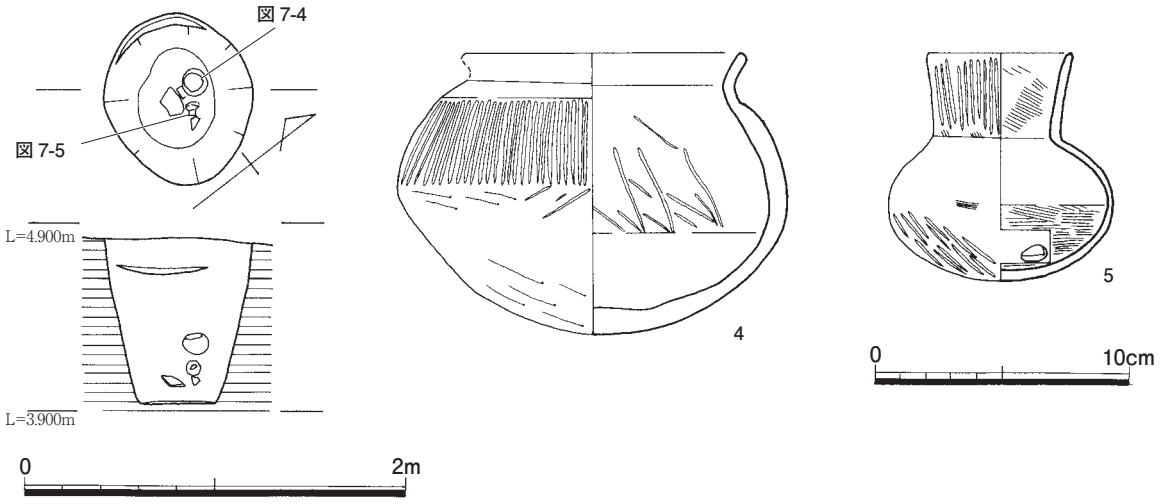


図６　ＳＥ０７および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

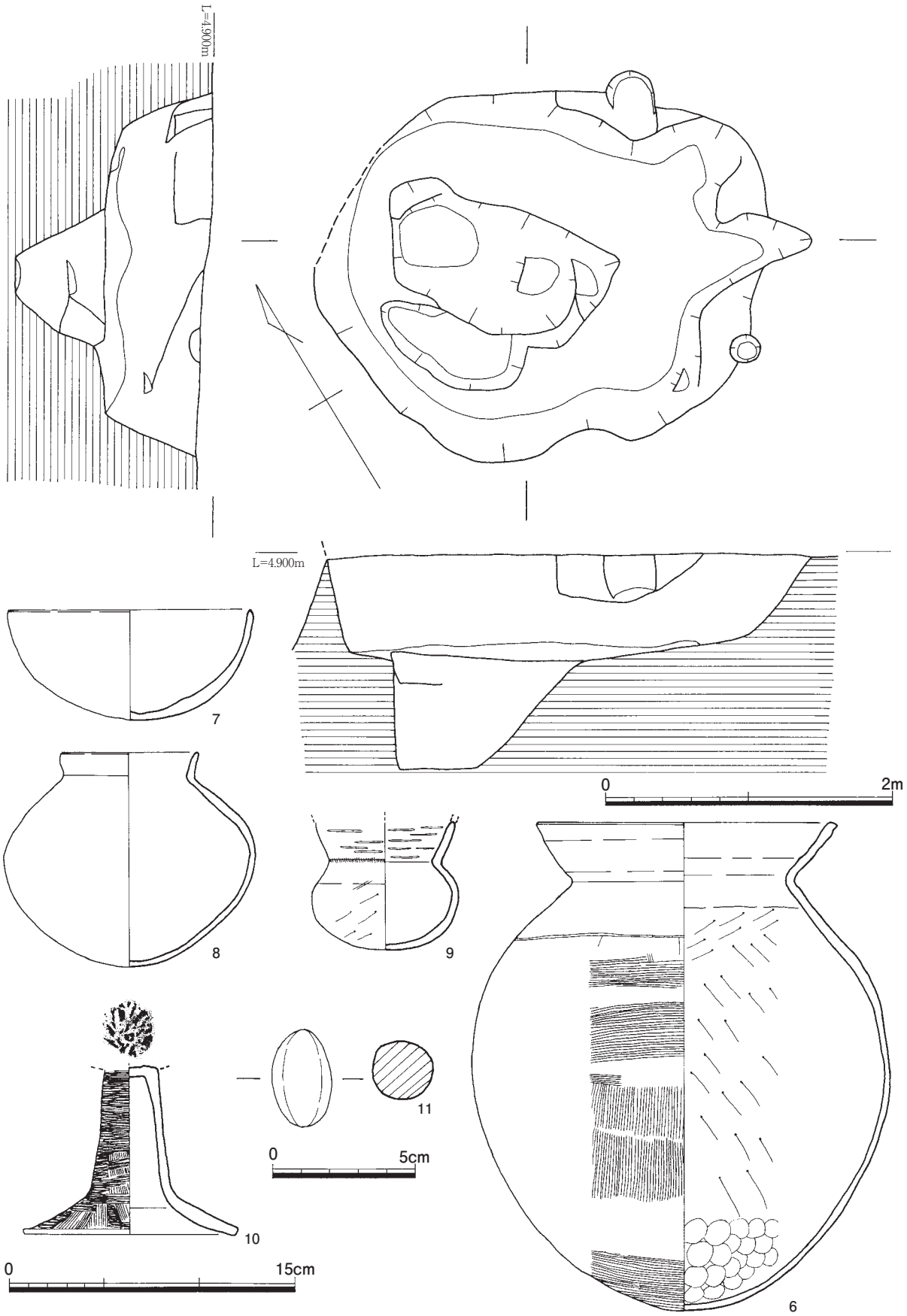


図７　ＳＥ０９および出土遺物実測図実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

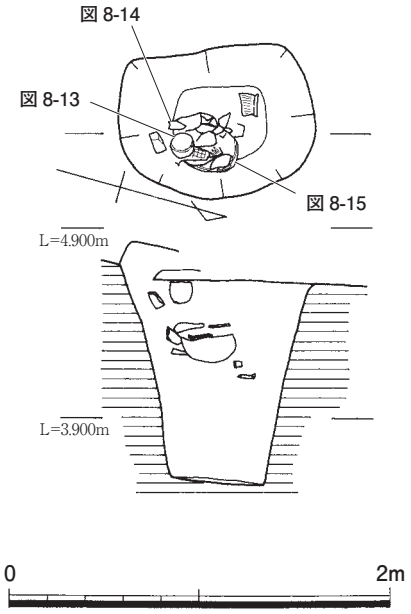
ＳＥ１２（図８、図版３）

ＳＣ０８の南辺中央で検出した。ＳＣ０８を切る。南北 1.3 m、東西 0.78 mの楕円形で、深さ 1.29 mである。古墳時代後期に属す。

出土遺物（図８、図版６）

13・14 は土師器の小型丸底壺である。13 は口径 11.5 ｃｍ、器高 10.0 ｃｍ、14 は復元口径 12.6 ｃｍ、器高 10.2 ｃｍで、ともに橙色を呈す。14 は底部に十字のヘラ描き線を施す。

15 は甕である。口径 18.6 ｃｍ、器高 29.8 ｃｍ。灰褐色を呈し、口縁および頸部の内外面はなで、胴部の内面はハケ目、同外面は平行タタキを施す。タタキは凹部に木目による沈線が残り、擬格子目状になっている。



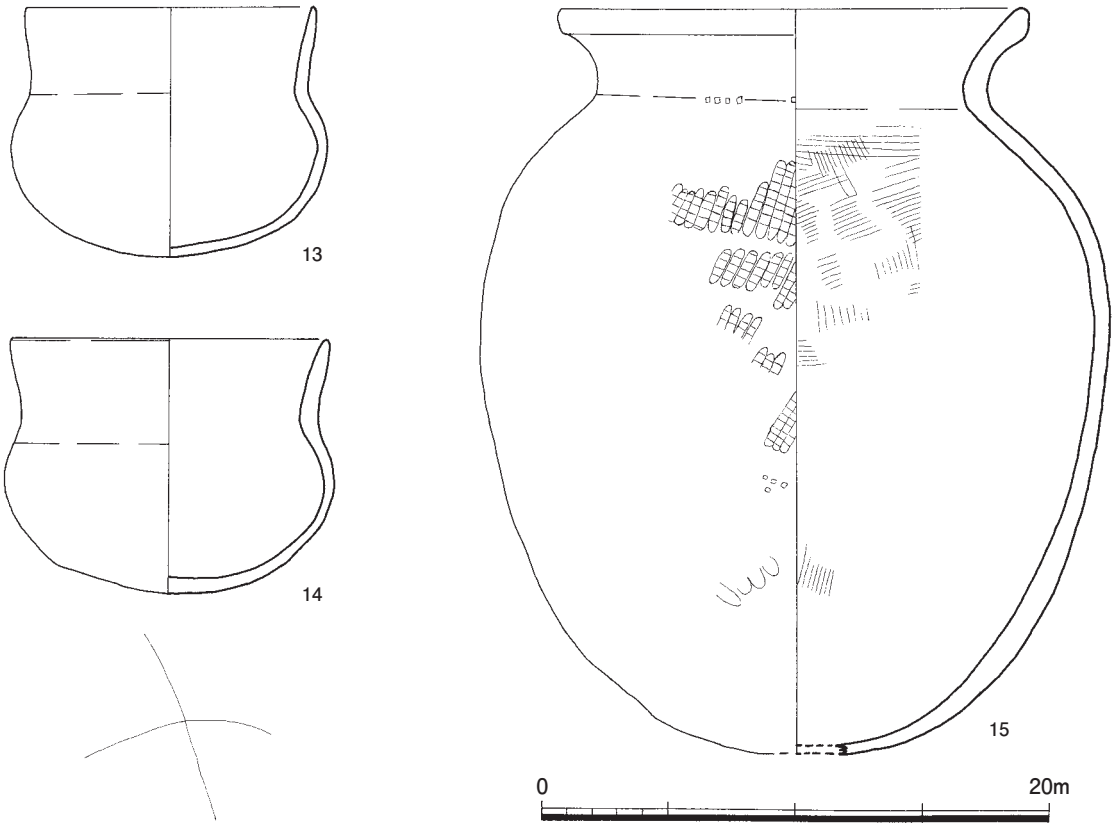


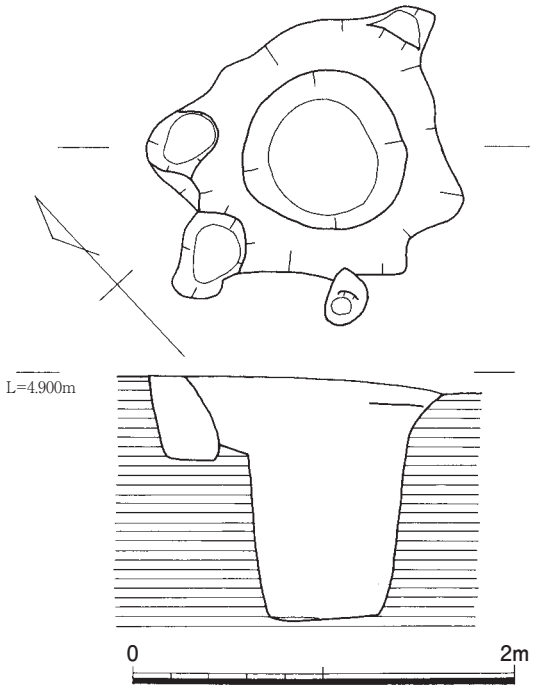
図８　ＳＥ１２および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

ＳＥ１３（図９、図版３）

調査区東隅、ＳＥ１４の西で検出した。南北 1.45 ｍ、東西２ｍで、深さ 1.28 ｍである。弥生時代後期中葉に属す。

出土遺物（図９、図版６）

16 は弥生土器の甕である。底径 8.6 ｃｍ、残存高 32.6 ｃｍ。淡黄褐色を呈し、胴部上半から下半にかけて黒斑がある。胴部内外面にハケ目を施す。



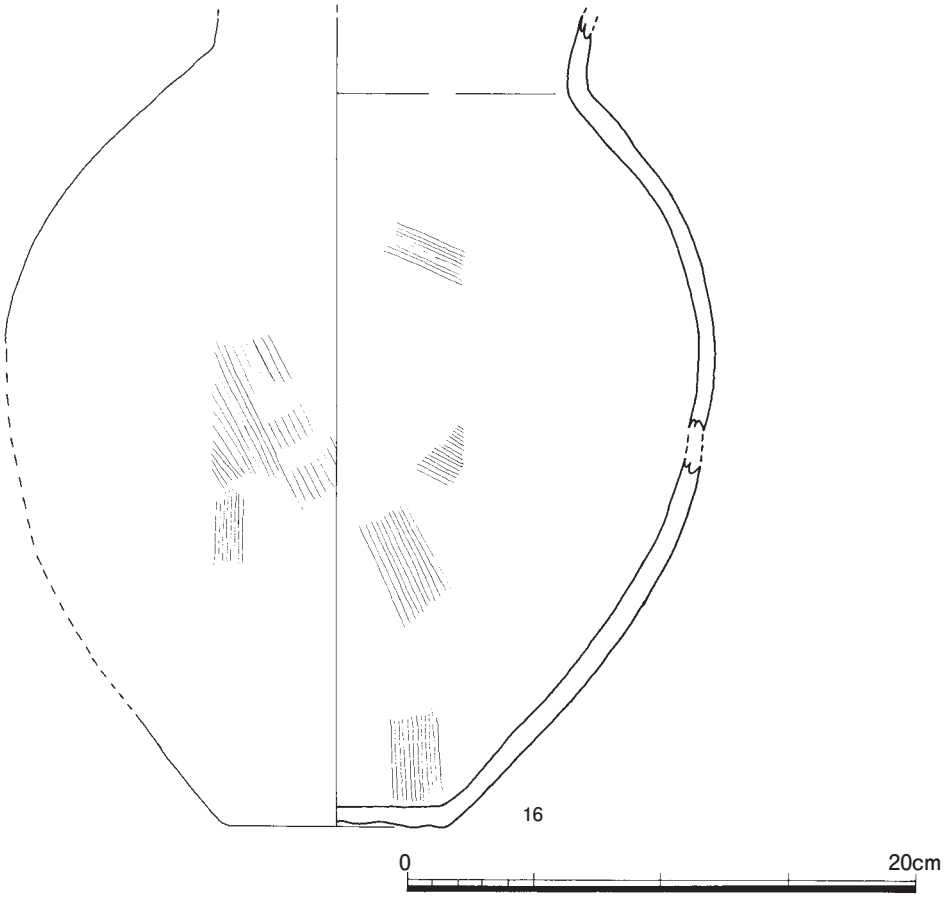


図９　ＳＥ１３および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

ＳＥ１４（図 10、図版３）

調査区東隅、ＳＥ１３の東で検出した。径 1.0 ｍ、深さ 1.15 ｍである。中層で完形の壺・鉢が出土している。弥生後期前半に属す。

出土遺物（図 10、図版６）

17 は弥生土器の壺である。口径 10.8 ｃｍ、器高 22.0 ｃｍ。淡灰褐色を呈し、体部の半分は黒斑がみられる。外面にハケ目を施す。18 は鉢である。口径 23.0 ｃｍ、器高 16.4 ｃｍ。褐色を呈し、内外面ともにハケ目を施す。19 は甕である。底径 6.2 ｃｍ、残存高 22.2 ｃｍ、外面は黒褐色、内面は灰褐色を呈し、内外面ともにハケ目を施す。

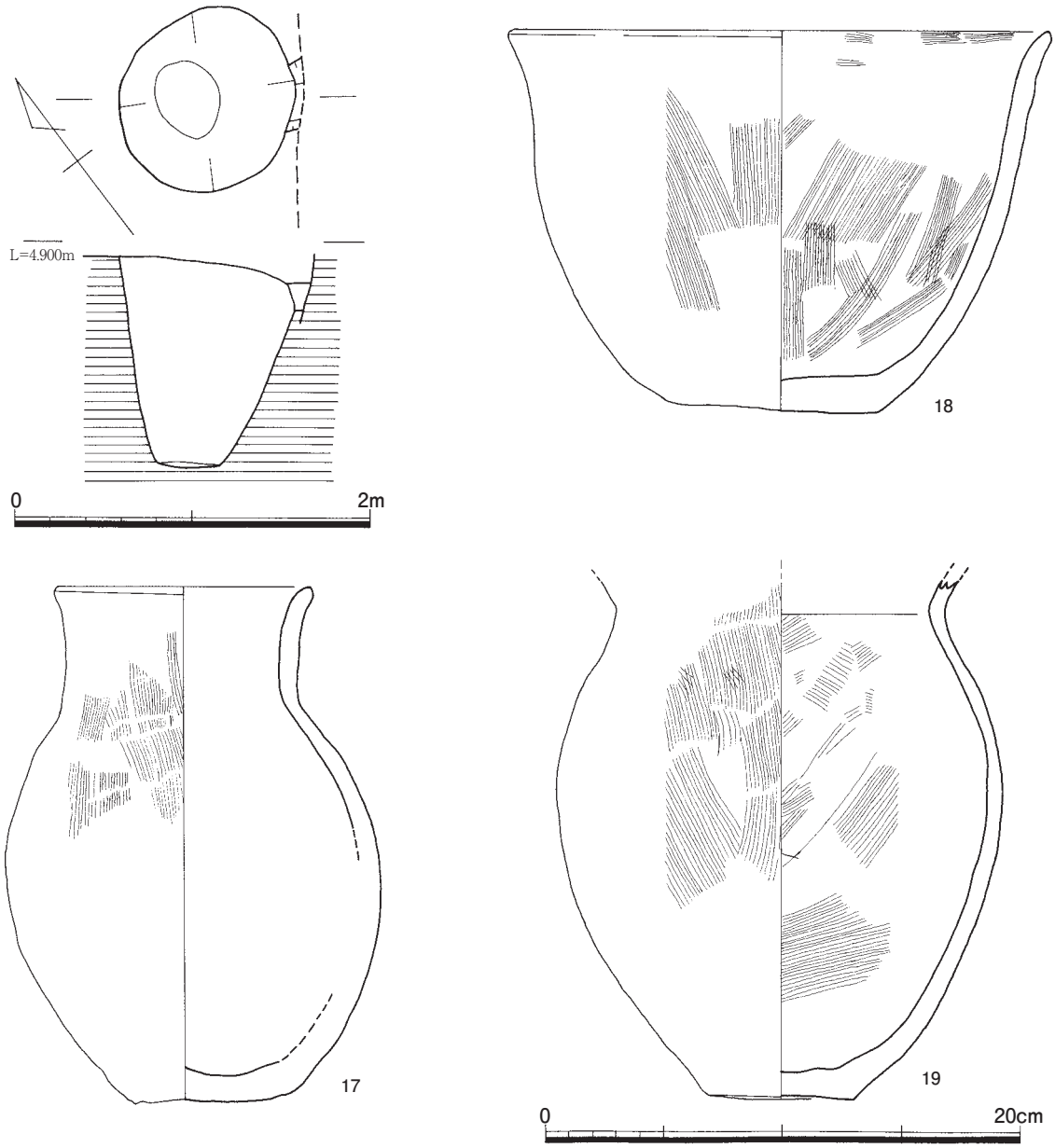


図 10　ＳＥ１４および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

竪穴建物

ＳＣ０８（図 11、図版３）

調査区中央で検出した。古墳時代後期の井戸ＳＥ１２に切られる。4.15 × 2.25 ｍの東西方向の隅丸長方形で、深さは 0.2 ～ 0.28 ｍである。長側辺となる北辺と南辺の外側約 0.2 ～ 0.4 ｍの位置に、４か所ずつピットを穿つ。ピットは最長 45 ｃｍ弱の長楕円形、深さ 13 ～ 38 ｃｍを測り、開口方向がすべて建物内側で、斜めに穿たれており、一部重複しているものがある。このことから、細い柱材が交差して屋根は三角形状をなす、それほど恒久的ではない簡易な建物で、一度作り替えられたとみられる。屋根の高さは柱穴の傾斜角から復元すると、床面から 2.1 ｍとなる。短側辺となる東・西辺の外側にはピットがなく、東西のいずれからでも進入できたものとみられる。床面上では炉などの遺構は確認されず、中央で甕または壺の平底が押しつぶされた状態で出土したのみである。弥生時代中期末に属する。

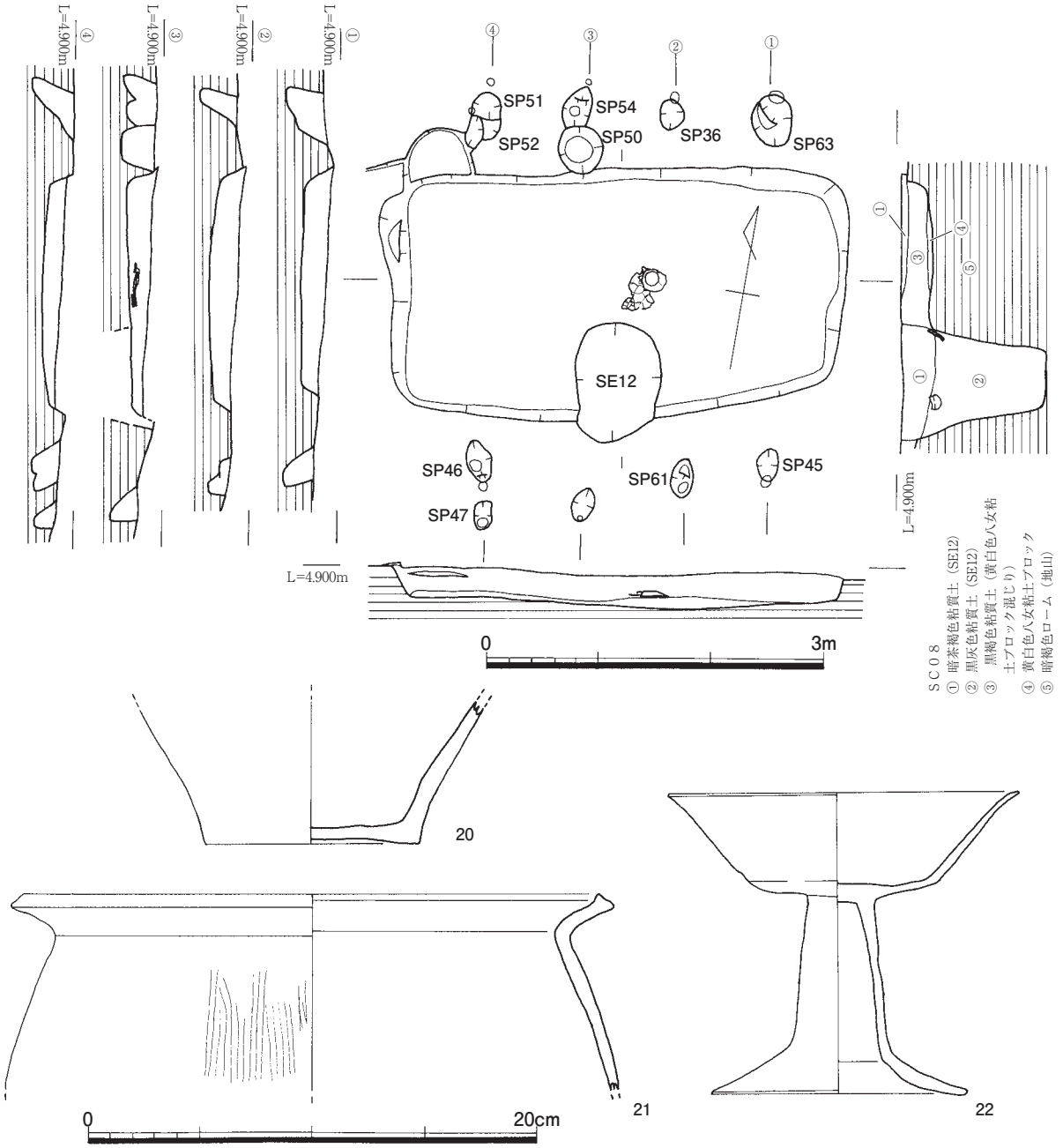


図 11　ＳＣ０８および出土遺物実測図（Ｓ＝１／60、１／３）

出土遺物（図 11、図版６）

20・21 は弥生土器の甕である。21 は復元口径 26.0 ｃｍ、残存高 8.9 ｃｍ。淡黄褐色を呈し、胴部外面にハケ目を施す。22 は土師器の高杯で、本来はＳＥ１２に伴うものとみられる。

土坑

ＳＫ１１（図 12、図版３）

ＳＥ０９の南東３ｍの位置で検出した。1.64 × 0.73 ｍの不整楕円形で、深さ 0.11 ～ 0.16 ｍである。

溝

ＳＤ０１（図 12、図版３）

調査区の北西隅から東辺中央に走る東西溝である。幅 0.6 ～ 1.1 ｍ、深さ 0.35 ～ 0.6 ｍの断面逆台形で、長さ 18.5 ｍ分を検出した。弥生時代終末の井戸ＳＥ０６、古墳時代前期の井戸ＳＥ０９を切る。遺物は弥生土器から土師器甑の把手、須恵器甕片が出土している。所属年代は古代か。

ピット・包含層出土遺物（図 12、図版６）

23 は打製石鏃である。長さ 3.0 ｃｍ、幅 2.1 ｃｍ、厚さ 0.4 ｃｍ。ＳＰ 29 出土。24 は土製投弾である。長さ 3.5 ｃｍ、幅 2.0 ｃｍで灰褐色を呈す。25・26 は石製穂摘具である。25 は残存長 8.3 ｃｍ、幅 4.3 ｃｍ、厚さ 0.8 ｃｍ、孔径 1.1 ｃｍ、孔心々間長 1.7 ｃｍで、灰色を呈す。26 は残存長 6.0 ｃｍ、幅 3.8 ｃｍ、厚さ 0.6 ｃｍ、孔径 0.5 ｃｍ、孔心々間長 2.2 ｃｍで、暗紫色を呈す。

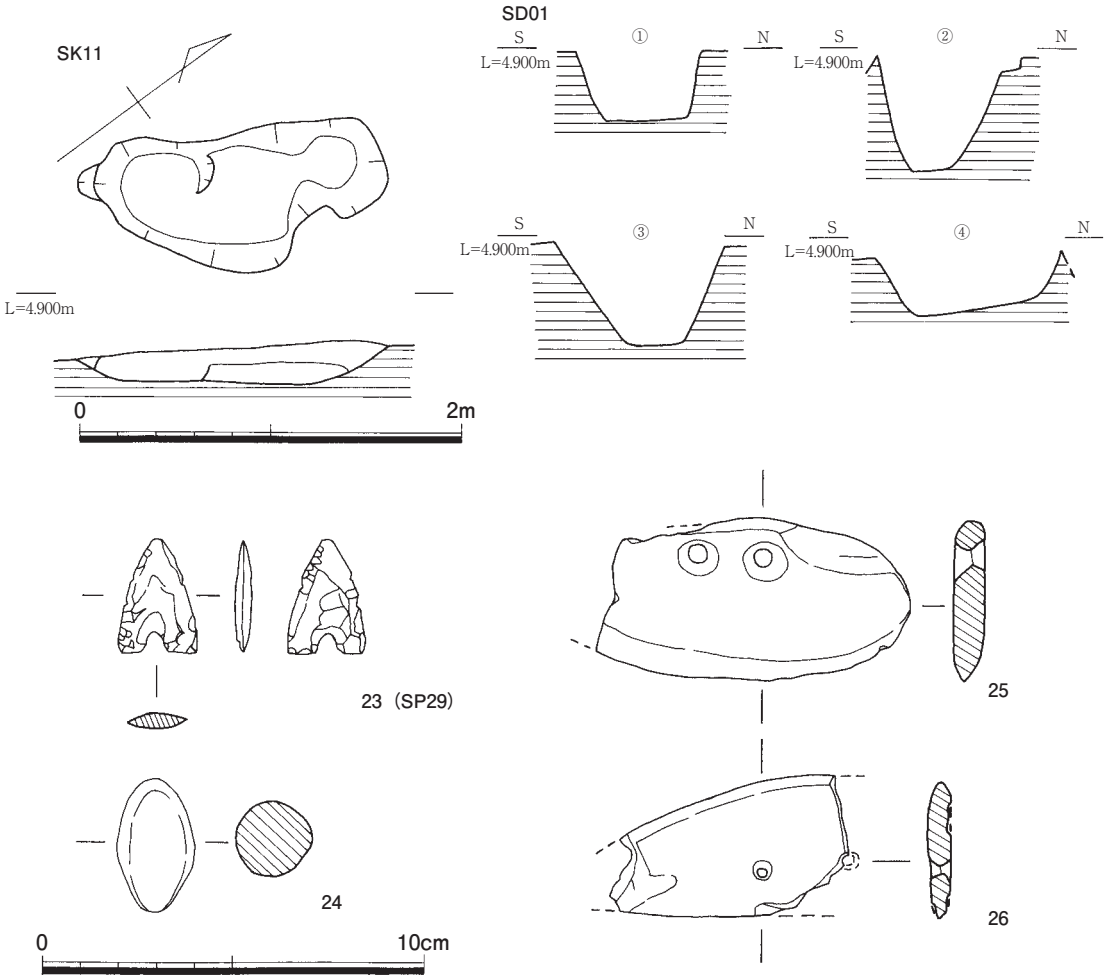


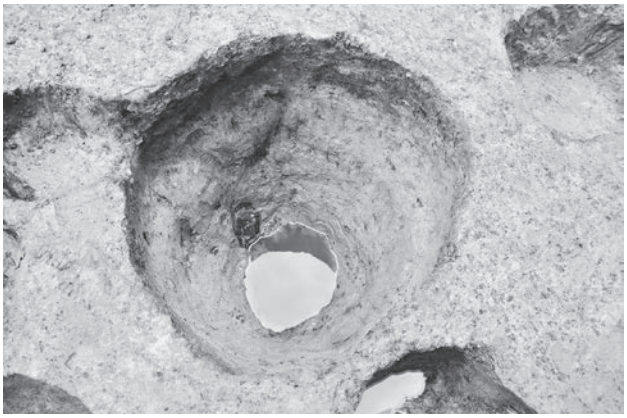
図 12　ＳＫ１１・ＳＤ０１およびピット・包含層出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／２）

全景（南から）

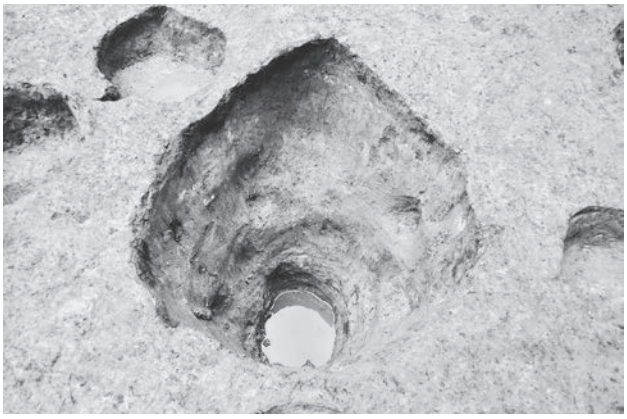
調査区東半全景（西から）

図版２

ＳＥ０３（南から）

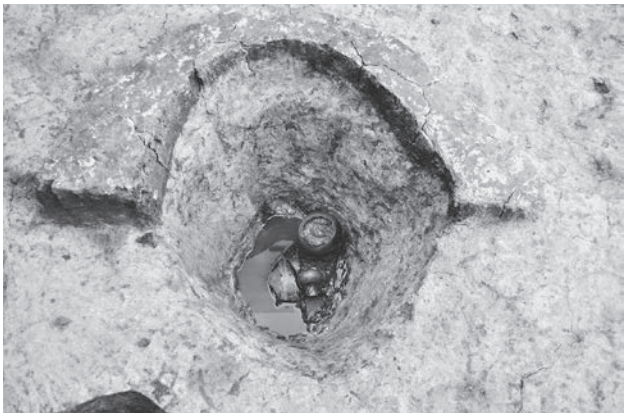


ＳＥ０４（北から）



ＳＥ０５（北から）

ＳＥ０６（西から）



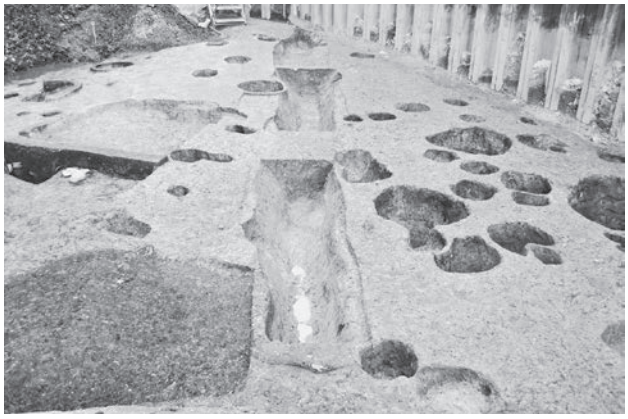
ＳＥ０７（南東から）

ＳＥ０９（北西から）

ＳＥ１２（東から）

ＳＥ１３（北東から）

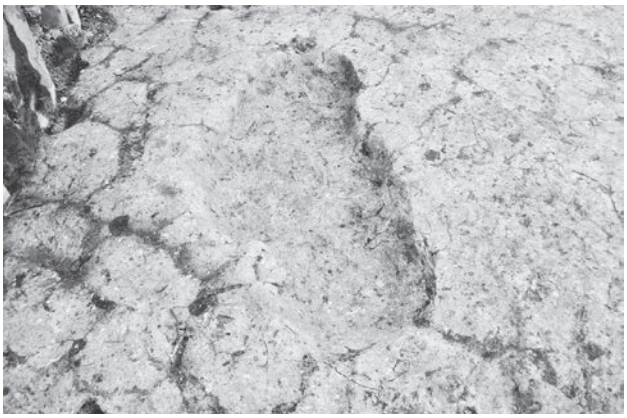
ＳＥ１４（北から）



ＳＤ０１（東から）

ＳＣ０８（東から）

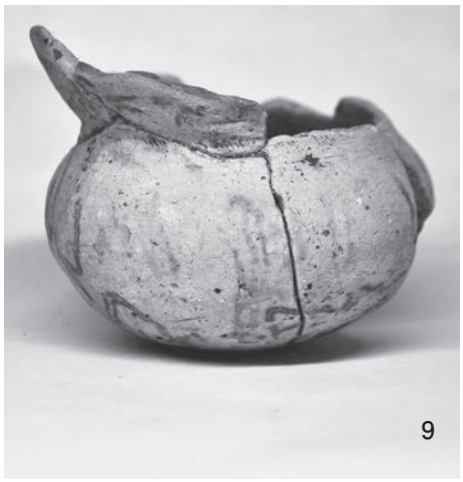
ＳＣ０８・ＳＥ１２土層断面（東から）

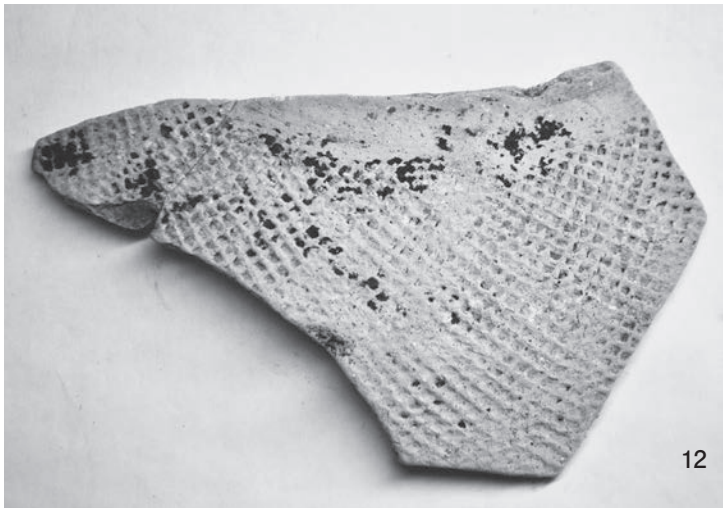


ＳＫ１１（北東から）

図版４

出土遺物１





出土遺物２

図版６

13

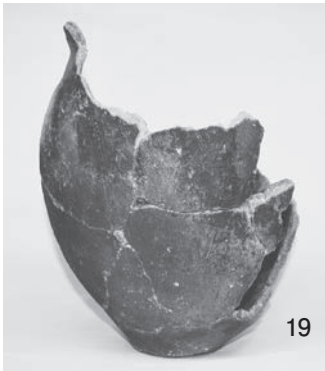
14

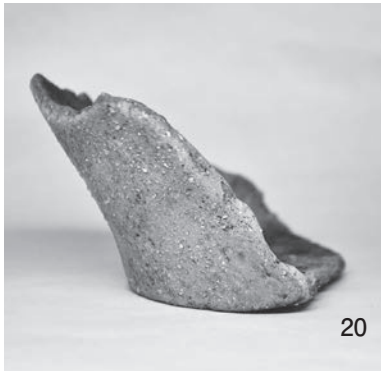
15.

16

17

18


19


20

21

22

23

24

25

26

出土遺物３

第３章　第１０８次調査報告

１　調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成 18（2006）年２月 16 日付で、南近代ビル株式会社より福岡市博多区博多駅南４丁目 132 － １地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号 17 － ２ － 1111）。申請地は比恵遺跡群の範囲内であることから、平成 18（2006）年６月 13 日に試掘調査を行った。試掘調査の結果、ＧＬ－ 150 ｃｍで弥生時代の土器を含む包含層および遺構が確認された。予定されている基礎工事による影響は避けられないため、工事により破壊される範囲については、記録保存のための調査を行うこととなった。

発掘調査は平成 18（2006）年８月１日に、バックホウによる表土剥ぎより着手した。その後順次遺構の検出・精査・実測を進め、８月 16 日に埋め戻し、終了した。

２　調査体制

発掘調査（平成 18 年度）

事業主体	南近代ビル株式会社		
調査主体	福岡市教育委員会		
調査総括	文化財部埋蔵文化財第１課長		山口譲治
	同課調査係長		山崎龍雄
調査庶務	文化財管理課		鈴木由喜
調査担当	事前審査	事前審査係	本田浩二郎
	発掘調査	事前審査係主任文化財主事	吉留秀敏
		埋蔵文化財第２課調査第２係	木下博文

資料整理・報告（平成 29 年度）

総括	経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課長	常松幹雄
	同課調査第１係長	吉武学
庶務	文化財保護課管理調整係	松尾智仁
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長	本田浩二郎
	同課事前審査係主任文化財主事	池田祐司
	同課事前審査係	清金良太
整理報告担当	埋蔵文化財課調査第１係	木下博文

３　調査の記録

調査の概要

調査区の現地表面の標高は 6.4 ｍである。堆積土は上層より、１層　造成土、２層　青灰色シルト質土、３層　黄褐色粘質土、４層、茶褐色粘質土、５層　黒色粘質土、６層　灰白～黄灰色粘質土となっている。２・３層は旧水田耕作土および床土である。４層は多量の土器小破片を含んでいる。中には弥生土器も含むが、立ち上がりの矮小化した須恵器蓋杯の杯身が含まれることから、７世紀・古墳時代終末に形成されたものとみられる。調査区内一面に広がっていた。上面で標高 4.85 ｍ、厚さ 20cm

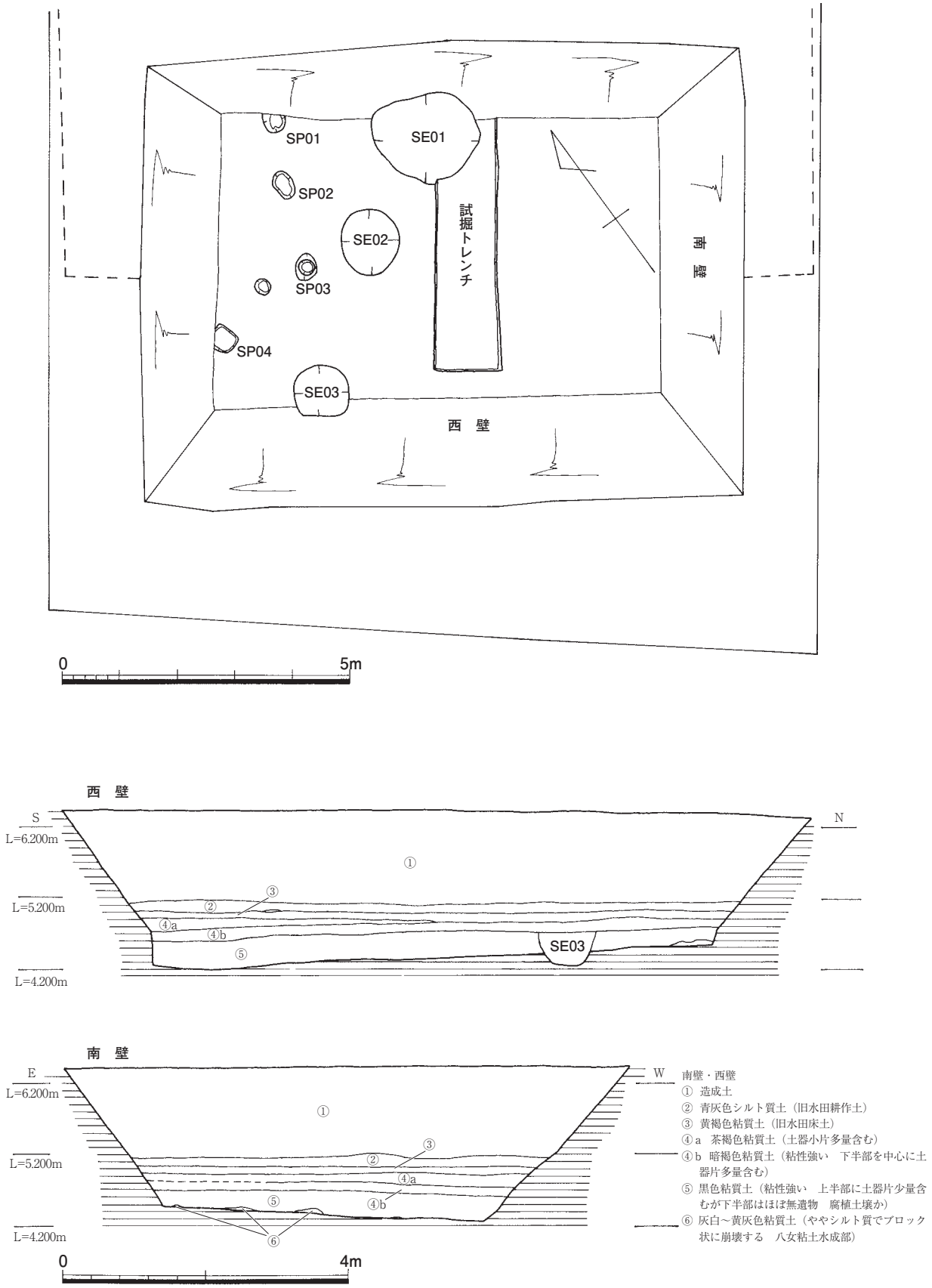


図 13　調査区平面および西・南壁土層断面図（S = 1 ／ 100、1 ／ 80）

強である。遺構検出は４層掘り下げ後、５層上面で行った。５層は上半に弥生土器が少量含まれるが、下半は無遺物である。６層は地山で八女粘土、最低で標高 4.2m である。

調査区内は比高差 40cm で北東から南西に向かって緩やかに傾斜しており、谷部を形成していたものとみられる。そのため有機質に起因するとみられる黒色粘土層が堆積し、滞水･湿地状態にあった。そこへ古墳時代終末期に一面を覆う大量の土器包含層が形成された。

検出した遺構は弥生時代後期の井戸１基、弥生時代終末の井戸１基、古墳時代後期～終末の井戸１基、古墳時代と見られる土坑、ピットである。なお鳥栖ロームは見られず、地山の八女粘土層上面では遺構は確認できなかった。

出土遺物は弥生時代中期～後期の土器、古墳時代後期～終末の土師器、須恵器甕・高杯・蓋杯、桃などの種子、黒曜石片など、コンテナ 18 箱分である。

遺構と遺物

井戸

ＳＥ０１（図 14・図版９）

調査区東壁にかかる位置で検出した。径 1.9 m、深さ 1.15 m。大甕５個体分・高杯・蓋杯など須恵器、土師器の他、種子、椀とみられる木片が出土している。７世紀、古墳時代終末に属す。

出土遺物（図 14・図版 11）

１～７は須恵器で、１は蓋杯の蓋、２は蓋杯の杯身、３は甑、４～７は甕である。１は復元口径 13.4 ｃｍ､器高 4.5 ｃｍ､真っ白に近い灰白色を呈し､焼成が不十分である。２は口径 10.7 ｃｍ､器高 4.2 ｃｍ、内面にM字状のヘラ描きがある。３は口径 8.8 ｃｍ、器高 13.1 ｃｍ、頸部および胴部外面にカキ目、胴部下半の底部付近に回転ヘラ削りを施す。胴部下半に横方向のわずかな凹みがあり、粘土紐の接合部か。４～７は口径 23.6 ～ 24.7 ｃｍ、器高 45.1 ～ 57.2 ｃｍ以上、胴部最大径 43.8 ～ 49.3 ｃｍで、調整は口頸部の内外面がなで、胴部外面が平行タタキおよびカキ目、同内面が同心円状当て具痕である。しかし色調が７のみ淡赤褐色を呈し、いわゆる赤焼きで頸部の半面３ヶ所に方位記号状の線刻を施している。

８は土師器杯である。淡赤褐色を呈し､体部外面の下半にヘラミガキ､同内面下半に暗文を施す。９･10 は種子で、９は桃、10 はヒョウタンか。

ＳＥ０２（図 15・図版 10）

調査区中央で検出した。長径 1.15 m、短径 1.05 mの楕円形、深さ 1.35 m。底から 10 ｃｍ上の位置で複合口縁壺が、口縁部を南、穿孔のある胴部を下にして横倒しに置かれていた。井戸祭祀と見られる。弥生時代後期中葉に属す。

出土遺物（図 15・図版 12）

11 は複合口縁壺である。復元口径 16.0 ｃｍ、器高 34.7 ｃｍ、頸部径 14.4 ｃｍ、胴部径 27.7 ｃｍ、底部径8.0 ｃｍである。淡黄褐色を呈し､頸部および胴部外面に粗いハケ目を施す。胴部下半に3.6 × 1.7 ｃｍの楕円形の穿孔がある。

12 は鉢である。口径 11.4 ｃｍ、器高 7.9 ｃｍ。灰白色を呈し、体部外面にハケ目を施すが、器面荒れでほとんど見えない。体部の３分の１が黒斑である。

ＳＥ０３（図 15・図版 11）

調査区西壁にかかる位置で検出した。径 0.95 mの不整円形、深さ 0.47 m。検出時には上面が欠損した状況で壺などが出土しており、削平を受けた可能性がある。弥生時代終末とみられる。

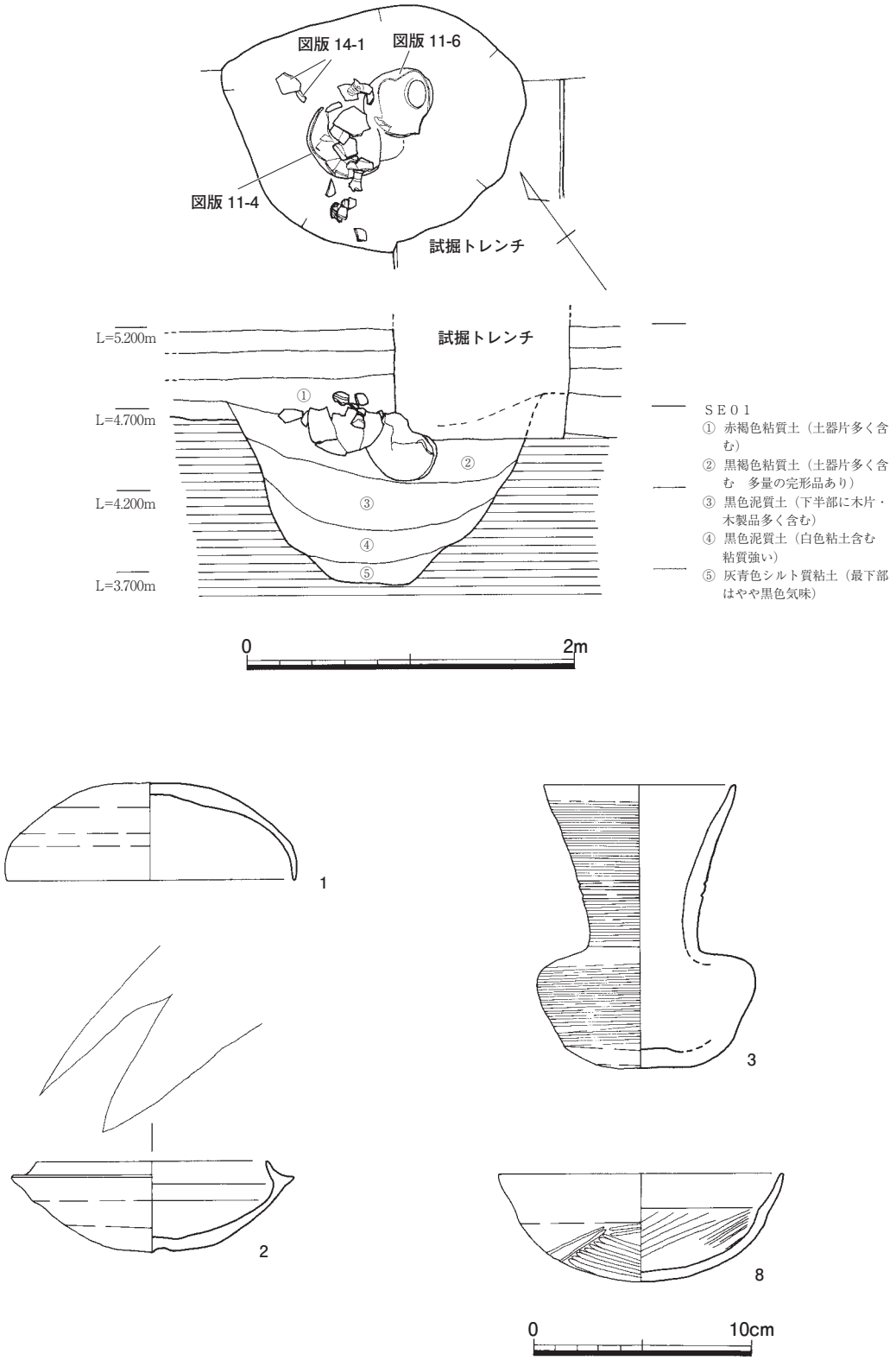


図14　ＳＥ０１および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

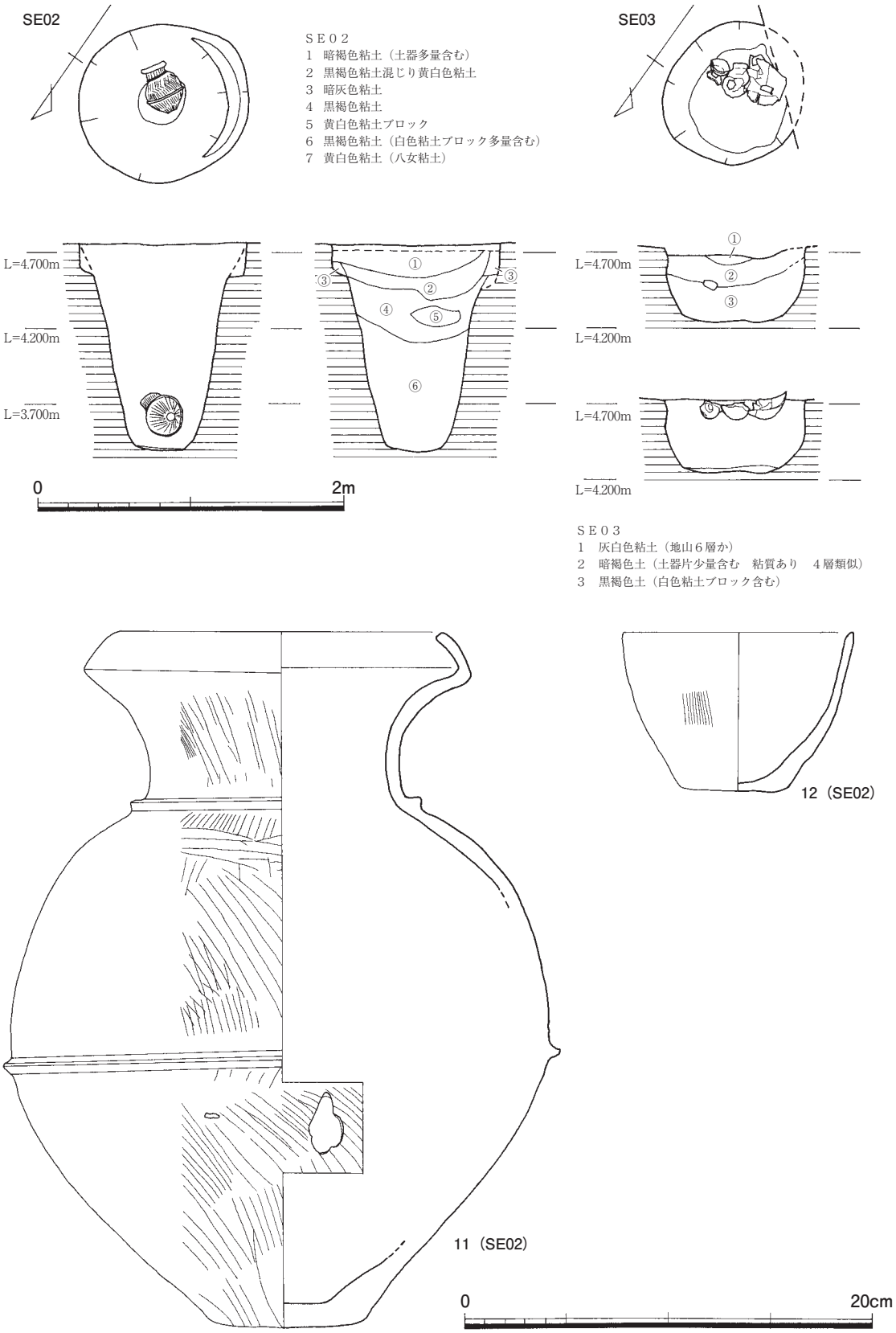


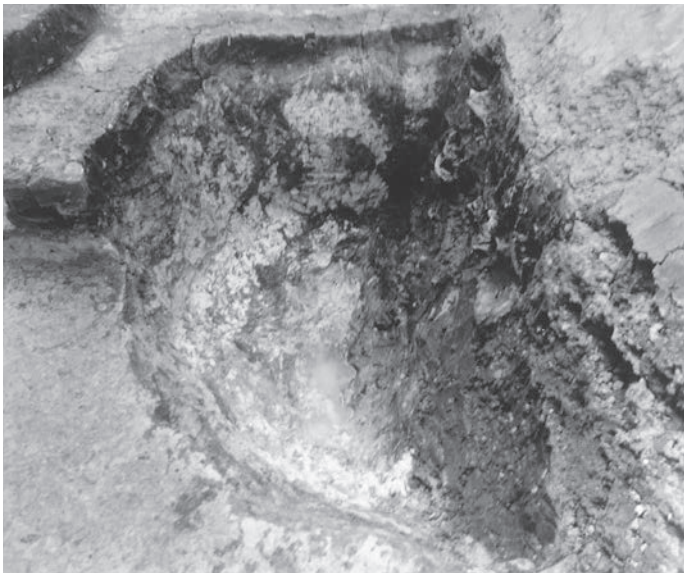
図15　ＳＥ０２・０３および出土遺物実測図（Ｓ＝１／40、１／３）

図版７

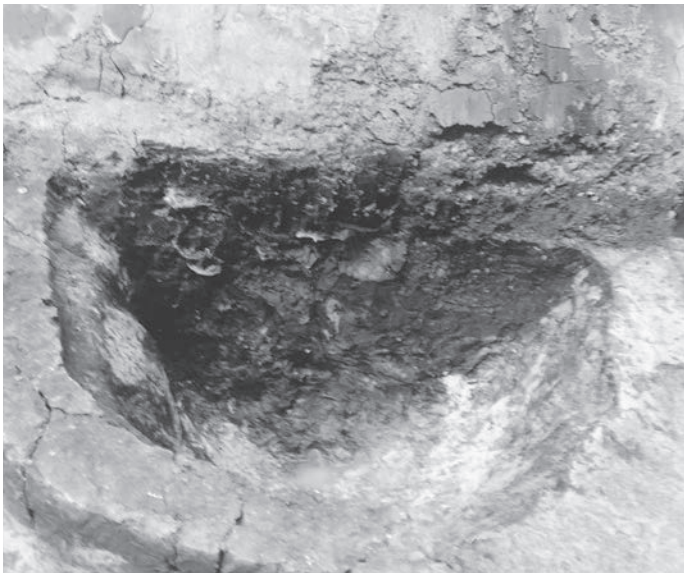
調査区全景（南東から）

調査区全景および西壁土層断面（北東から）

調査区南壁土層断面（北西から）



ＳＥ０１（南から）



ＳＥ０１土層断面（南西から）

ＳＥ０１遺物出土状況（南から）

図版９

ＳＥ０２（北から）

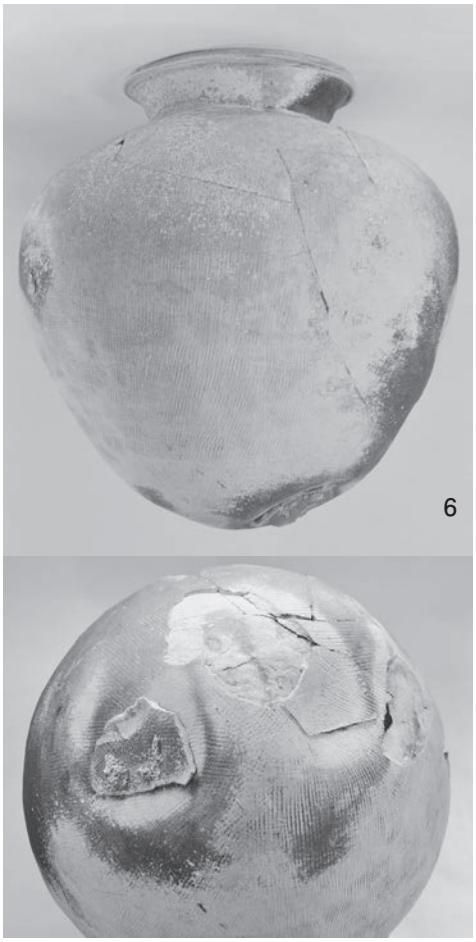
ＳＥ０２土層断面（北から）

ＳＥ０２壺出土状況（北から）

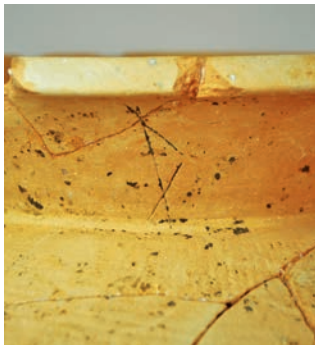
ＳＥ０３（北から）

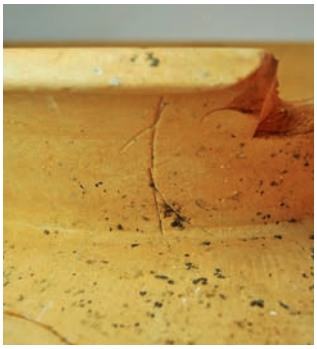
ＳＥ０３遺物出土状況（北から）

図版 11



出土遺物 1





出土遺物２

第４章　まとめ

今回の調査では、台地部から谷部への地形の変換点に沿って、弥生時代から古墳時代にかけての井戸を中心に遺構を検出した。147 次調査で９基、108 次調査で３基である。

標高 4.9 m付近を東西に走る 147 次ＳＤ０１の線が台地部の縁辺にほぼ当たっており、これを境として、各時期の井戸が並んでいる。いずれの井戸も湧水が良好で、調査期間中雨が降らずとも常に満水を保っていた。生活用水の確保に困ることはなかったであろう。しかも比較的浅い掘方で湧水層に達することができた。ゆえに長期にわたり格好の水場として利用され続けたことが良くうかがえる。

井戸の構造は、いずれも円形を基調とした素掘りであるが、147 次ＳＥ０９のように、大きな掘方で段差を設けて水を汲むために昇り降りするものがある。これは高野陽子氏により「降下取水式」と呼ばれるタイプで、福岡市内では那珂遺跡群 102 次ＳＥ 147（１）、比恵遺跡群 51 次ＳＥ 301・ＳＫ 301（２）、有田遺跡群 223 次ＳＥ０２３（３）などがあるが、北部九州ではあまり一般的ではなく（４）、貴重な事例となる。このタイプの井戸については、現在弥生終末～古墳前期前半に位置づけられる傾向がみられる。

また井戸祭祀の面でも、今回興味深い事例を加えることができた。147 次ＳＥ０３と 108 次ＳＥ０２はともに弥生時代後期中葉で完形の複合口縁壺を祭祀遺物として入れていたが、それぞれ特徴が異なる。前者は網袋の痕跡を明瞭に残すもの、後者は胴部に穿孔したものであった。

網袋の痕跡については、福岡市内では比恵９次３号井戸（５）、那珂 102 次ＳＥ 137、他地域では奈良県大和郡山市・白土遺跡ＳＥ０１（６）、滋賀県野洲市・湯ノ部遺跡ＳＥ２２０１（７）などがある。一般的に水の汲み上げ容器としての機能が考えられているが、近年韓国で酒などの醸造容器であるという説が出されており（８）、今後の再検討が俟たれる。

比恵・那珂遺跡群をはじめ福岡市内での井戸検出事例そのものは、2013 年の集成時点で 700 を越え 800 に迫ろうという状況の中で、その圧倒的多数が弥生時代から古墳時代前期に属するものであり、珍しいものではない。

だが古墳時代終末、飛鳥時代のものはまだまだ少数で、今回検出した 108 次ＳＥ０１は貴重な事例である。出土遺物の主体が須恵器で蓋杯・高杯・甕という器種構成では、比恵 49 次ＳＥ０１（９）・同 99 次ＳＥ 195（10）と共通する。ただこの２例と違う点は大甕を５個体も入れていることである。しかもその内の１個体（図版 12 － 7）は淡い赤褐色をした「赤焼き」であり、通常の青灰色をした他の４個体とは非常に対照的な印象を受ける。かつ頸部に線刻を施しており、製作当初から祭祀用の特別品としての意図が込められていた可能性が高い。

さらに桃の種が出土している点も注目できる。比恵 49 次ＳＥ０１も土師器甕から桃の種が出土している。他に元岡・桑原 18 次ＳＥ 286（11）は付近に磐座ともみられる巨岩や石組があり、祭祀場としての性格がうかがえる。桃以外にヒョウタンの事例もある（那珂 102 次ＳＥ 43・13）。分析同定を行っていないため断定できないが、108 次ＳＥ０１でも桃以外の種（図版 12 － 9）があり、ヒョウタンの可能性がある。飛鳥期の井戸祭祀には、使用する土器の器種と植物の種類に強い共通性があるらしく、興味深い。

以上のように、調査地点の南半は黒灰色の粘質土が堆積していることから、弥生時代中期には湿地でぬかるんでおり、地下水位が高く、井戸掘りに最適な環境にあった。そこに多量の遺物が投棄され、特に古墳時代終末には１層をなし、谷部全体に広がり、完全に埋まった状態になったとみられる。類似した環境・条件として、御笠川に近接する那珂 102 次調査地点が非常に注目される。

以上のような環境の中で、まだ湿地状態であったとみられる弥生時代後期に、湿地の際に特異な構造の建物１棟（147 次　ＳＣ０８）が建てられている。

柱穴の検出状況から三角屋根であったとみられる例は、福岡市内では麦野Ｃ遺跡５次調査で２例確認されている(12　ＳＣ－０１２・０９２)。それによると、０１２は２ｍ余り四方で、北西・南東側の壁面に各１ヶ所、外側へ斜め方向に掘削された柱穴が検出された。南壁に接して小児甕棺が検出された。弥生前期末に位置づけられている。０９２は4.1 × 3.3 ｍの方形で、東西の側壁に各１ヶ所斜めに掘削した柱穴を検出された。床面には四周に壁溝がめぐり、南壁寄りのところで通常の柱穴とは異なる目的で掘削されたとみられる深さ1.85 ｍの柱穴状土坑が単独で検出された。床面中央部では意図的に集中廃棄されたとみられる土器群が検出された。弥生後期前半に位置づけられている。

以上の２例は時期が異なるものの、簡易な作りと特殊な用途から、祭祀遺構、具体的には死者を埋葬するまで一定の期間悼むための施設、モガリ屋であったと想定されている。

これらと比較して、共通点はあるものの、建物の平面形や柱穴の数、湿地の際という立地の違いから、今回の検出例はまた違う用途を想定しなければならないであろう。

簡易な作りで恒久的なものではなく、住居としての用途を想定するには狭く、炉などの痕跡に乏しい上に、単独で建っており、立地も水辺である。以上の点から現在の手漕ぎボート程度の小舟を収容した小屋であったのではなかろうか。ＳＣ０８は東西方向に長く、谷部に対してやや斜め方向に配置され、東西の短辺には柱穴がなく、人や物の出入りができる作りになっている。他にこのような類例がなく、仮説の域を出ない。

いずれにしても今回の調査により、水場として長く利用され続けてきた場所のありようが明らかになり、さらに今後の調査・検討に俟つ興味深い事例を加えることができた。

注

（１）岡三リビック株式会社編 2008『那珂遺跡群 51』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1021 集

（２）白井克也編 1996『比恵遺跡群 21』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 452 集

（３）森本幹彦編 2010『有田・小田部 47』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1067 集

（４）久住猛雄氏のご教示による。

（５）杉山富雄編 1986『比恵遺跡　第９・10 次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 145 集

（６）中井一夫編 1985「白土遺跡」『奈良県遺跡調査概報 1984 年度第２分冊』奈良県立橿原考古学研究所

（７）濱修・山尾幸久編 1995『湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（財）滋賀県文化財保護協会

（８）이창희・구숙현 2016「網痕土器의 機能論的 연구」『崇實史學』第 37 輯
久住猛雄氏のご教示による。

（９）佐藤一郎編 1995『比恵遺跡群（16)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 402 集

(10) 星野恵美編 2007『比恵 46』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 955 集

(11) 吉留秀敏編 2010『元岡・桑原遺跡群 16』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1102 集

(12) 本田浩二郎編 2000『麦野Ｃ遺跡－麦野Ｃ遺跡第５次調査概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書 643 集
池田祐司氏のご教示による。

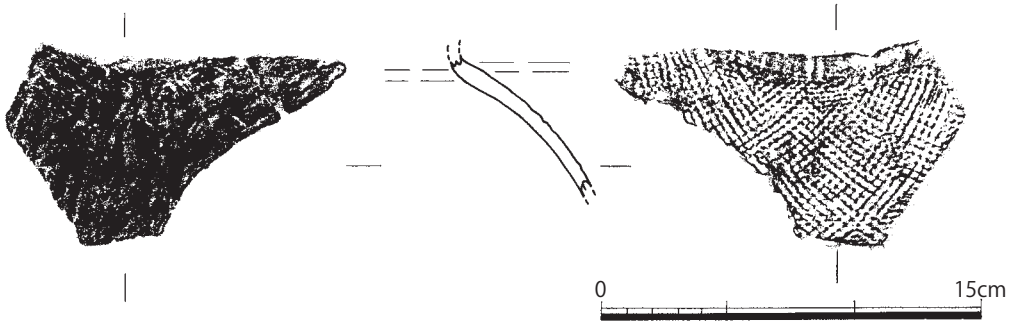


図 16　147次SE09出土の三韓系瓦質土器（Ｓ＝１／３）

報告書抄録

ふりがな	ひえ
書名	比恵85
副書名	比恵遺跡群第147次・108次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第1353集
編著者名	木下博文
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１－８－１
発行年月日	2018年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひえいせきぐん 比恵遺跡群 第107次	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 はかたえきみなみ 博多駅南 4丁目132-1	40132	0127	33° 34′ 49″	130° 25′ 51″	20161201～ 20170130	225.32	記録保存 調査
ひえいせきぐん 比恵遺跡群 第108次	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 はかたえきみなみ 博多駅南 4丁目132-1	40132	0127	33° 34′ 40″	130° 25′ 47″	20060801～ 20060816	92.93	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群	集落跡	弥生～古代	井戸、竪穴建物、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、石器	弥生時代後期～古墳時代後期の井戸、弥生時代中期の竪穴建物、古代の溝などを検出

要約

比恵遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた標高５～８ｍの低位段丘上に立地する集落遺跡である。今回の調査地点は遺跡の北東端付近に位置する。旧地形では東隣の山王遺跡との間にある南北の谷が西に入り込む、その北岸に当たる。現況で標高６ｍ強である。

調査区内は、北半の台地部と南半の谷部に大きく分かれる。台地部では弥生時代後期から古墳時代後期の井戸９、弥生時代中期の小屋掛け竪穴建物１、古墳時代後期以降の東西溝１、ピット90を検出した。谷部では７世紀代の須恵器蓋杯など多量の土器破片を含む暗茶褐色粘土層を検出した。

比恵85

−比恵遺跡群第147次・108次調査報告−
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1353集

2018年（平成30年3月26日）

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　髙良印刷
〒812-0042　福岡市博多区豊2丁目1-28